

～山川草木みなほとけ～

伝教 大師

1200年

大遠忌



五十年に一度の尊き勝縁

天台宗では、平成二十四年（二〇一二）四月一日から平成三十四年（二〇二二）三月末日までの十年間を祖師先徳鑽仰大法会の期間と定め、これまで慈覚大師一千五百年御遠忌を第一期に、続いて第二期では恵心僧都一千年御遠忌、伝教大師御生誕一千二百五十年、相応和尚一千百年御遠忌御正當を迎えその御恩に報いる法要や様々な記念事業を奉修してまいりました。

そしていよいよ平成三十三年（二〇二一）には日本天台宗の祖、伝教大師が入寂されてから一千二百年の大遠忌御正當年を迎えます。伝教大師一千二百年大遠忌は十年に亘る祖師先徳鑽仰大法会の掉尾を飾る行事といたさねばなりません。

正しい仏教を弘め、法華一乗の教えを根本に、生きとし生けるものすべてが等しく平和と安寧を享受する理想的な社会の建設を目指された伝教大師の願いは、各宗各派の祖師先徳方に受け継がれ、今も脈々と伝えられております。この勝縁を機に、多くの皆様と共に伝教大師の御誓願をあらためて心に刻み、手を取りあいその実現に邁進する機会にしたいと思います。

天台宗宗務当局並びに総本山延暦寺当局は一致協力し、全力を傾注し取り組んでまいる所存であります。

平成三十年四月一日

祖師先徳鑽仰大法会事務局 局長

天台宗 宗務総長

杜多 道雄

本冊子は東京教区華徳院住職神達知純大正大学准教授、東京教区如意輪寺住職木内堯大正大学特任准教授の両師にご執筆いただきました。

伝教大師

最澄

「私のために仏を作つてはなりません。」

私のために経を写してはなりません。私の志を述べなさい。」

伝教大師最澄^{でんきやうだいし}さまが、お亡くなりになる少し前に弟子たちに伝えた言葉で

す。それでは大師の志とは一体どのようなものなのでしょう。それは、正しい
仏教を広め、素晴らしい人材を育て、すべての人が仏さまとなることができ
る世界を実現するということに違いありません。

二〇二二年六月四日は、大師がお亡くなりになられて、ちょうど
一千二百年目の年にあたります。大師の志は一千二百年の間も
絶えることなく、今でも受け継がれているのです。



ご誕生とご出家

伝教大師は天平神護二年(七六六)〔一説に神護景雲元年(七六七)〕近江国(現在の滋賀県)の坂本にある生源寺のあたりにお生まれになったと伝えられています。お父様の百枝さまはその地域をおさめていた三津首という一族の方で、お母様は藤子さまと言われています。なかなか後継ぎにめぐまれなかったお二人が比叡山の神に願いを込めてお参りしたところ、ようやく大師を授かることができました。

大師は幼い時、「広野」というお名前でした。広野さまは幼いころからとても優秀で、さまざまな勉強にはげんでいましたが、神仏への信仰の深いご両親の影響で、十三歳(一説十二歳)の時に僧侶となる道を選んだのです。そして、近江国の国分寺に入門し、近江国師の行表法師の弟子となり、



▲ 生源寺 産湯の井戸

「最澄」という名前をいただきました。

ある時、行表さまは大師に「心を一乗に帰すべし」という言葉を伝えました。一乗とは、仏となることを目指す一つの乗り物ということを意味します。仏教の教えには、様々な目的地を目指すものがあるけれども、全ての人が必ず仏となれる一乗の教えをいつも心に大切に思うべきであるという意味です。

大師はこの言葉に大きな感銘を受けました。そして師、行表さまの教えをまもり、一生涯を通じて一乗の教えを弘めることに努力しつづけたのです。



▲ 『伝教大師絵伝』行表法師につき出家する(延暦寺蔵)

比叡入山

延暦四年(七八五)四月六日、大師は奈良の東大寺で、一人前の僧侶となるために必要な二五〇条の具足戒(修行者が守るべき生活規律)を授かり、国に認められた正式な僧侶となりました。ところが、本来であれば奈良に留まるか、近江の国分寺に戻り、僧侶としての地位を高めていくべきであったのですが、その後わずか三ヶ月足らずで、修行の地を求めて人里離れた比叡山に入られました。

比叡山に入山してまもなく書かれた『願文』には、その時の決意があらわされています。

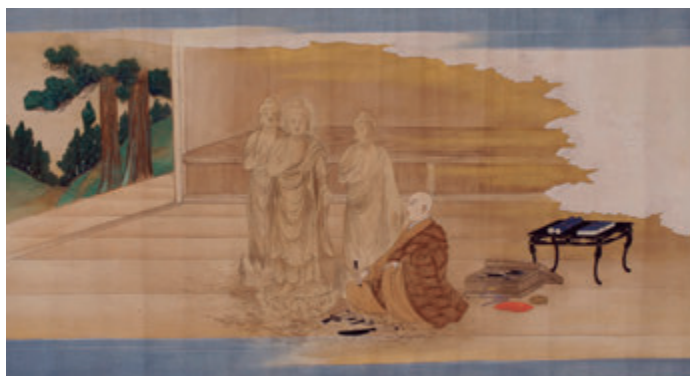
「せっかく人間に生まれ、仏の教えに出会うことができても、善い心を持続けることができなければ、地獄の薪になるより他はない。それなのに、今の私は十分に正しい修行ができていない愚かで最低の人間である。だからこそ誰よりも精一杯努力をして、多くの人を救い導いて行くことができるような強い自分にならなければならない。それまでは、この修行を決してやめることはできないのだ。」と。

このように若き大師は、名誉や権力などの道を離れ、心を清らかに保ち、自らを高めるための最良の地として、比叡山という場所を選んだのです。

延暦七年(七八八)、大師は比叡山の上に一乗止観院(後の根本中堂)という小さなお堂をつくりました。そして、自ら刻んだ薬師如来の仏像をそこに安置し、灯明を点じました。

この時、大師は「あきらけく 後の仏の御世までも 光りつたへよ 法のともしび」という歌を詠まれました。

この灯明が多くの人々によって受け継がれ、明々と周りを照らし続けていけるように、仏のいない時代であっても仏の教えが人々にずっと護り継がれ、人々をあたたく照らし続けていくようにという希望を持って、薬師如来のご宝前に一つの明かりを灯したのです。この灯明は「不滅の法灯」と呼ばれ、以来二千年



▲『伝教大師絵伝』自刻の薬師如来像を一乗止観院に安置した(延暦寺蔵)

二百年以上もの間、現在まで一度も絶えることなく、比叡山の根本中堂に灯され続けています。

比叡山で修行を続けている間、大師は中国の仏教書を読み、そこに引用されている中国天台宗の祖、天台大師の教えを学びました。そして、『法華経』を中心とする天台の教えこそが、すべての人々を仏へと導くために最善の教えであると確信したのです。

その後も大師は厳しい環境の比

叡山で修行を続けました。そしてその清らかな修行態度が評価され、宮中で天皇の間近に奉仕して病氣平癒を祈る内供奉十禪師という役職に任命されました。延暦十六年（七九七）のことでした。

また、大師は比叡山の修学環境を整えるために、さまざまな經典（一切経）を集める計画を立てました。色々な所に声をかけて協力を仰いだところ、大師の思いに応じて奈良大安寺

の閑寂法師、東国（現在の関東地方）の道忠禪師らが大量の仏典を書き写してくれました。

延暦二十年（八〇一）、大師は奈良の高僧たち十人を比叡山に招き、『法華経』の法会を開催しました。

それぞれの高僧が自らの立場で『法華経』の教えを説き、大師も天台教学による『法華経』の解釈を披露しました。それを聞いた奈良の高僧たちは、氷がとけて水となるように、いままで分からなかった問題がすべて解決する素晴らしい教

えであるとは高く評価しました。

翌年には桓武天皇の側近である和氣広世さま・真綱さま



▲『伝教大師絵伝』法華十講始める（延暦寺蔵）

お二人の兄弟の招きにより、高雄山寺（現在の京都神護寺）で天台の教えを講義し、大師の名声はいよいよ高まりました。また、新しい仏教の力を求めていた桓武天皇も大師に大いに期待を寄せることとなりました。

しかし大師の思いは、經典など本の知識で天台の教えを学ぶだけでは満足できるものではありませんでした。命の危険をおかしてでも唐（現在の中国）の国に渡って、中国天台宗の中心である天台山に赴き、正しくしっかりと天台の教えを学びたいと願ったのです。

延暦二十一年（八〇二）、桓武天皇によって、大師を唐に派遣することが決定されました。また通訳の僧として義真さまの入唐も認められることとなりました。



▲桓武天皇像（延暦寺蔵）

入唐求法

延暦二十二年（八〇三）四月、遣唐使一行は難波（大阪）を出発したものの暴風雨にあい、一年間九州に留まりました。翌年七月、肥前国田浦（長崎県平戸市）を再び出発しました。大師の乗った船ははげしい荒波にもまれ一ヶ月も漂流したのですが、当時の航海技術ではただ神仏に祈るより他に方法がなかったといえます。そして、ようやく九月一日に明州（現在の浙江省寧波）に到着しました。一緒に出発した四船のうち、二船は遭難し、空海さまの乗っていた一船もはるか南へと流されるという、大変厳しい航海でした。大師はさっそく天台宗の聖地である天台山を目指し、麓の台州に到着しました。そこで天台山修禪寺座主の道邃和尚と出会うことができました。道邃さまは大師に天台教学の書物を貸し与え、書写の便宜を図ってくれました。いよいよ天台山に向かった大師は、天台山仏隴寺座主の行満和尚から天台教学を伝えら



▲『伝教大師絵伝』天台の教えを求めて入唐する（延暦寺蔵）

れ、また禪林寺の脩然禪師からは坐禪を学びました。

天台山での受法を終えた大師と義真さまは再び台州に戻り、道邃さまから天台教学と大乘菩薩戒を授かりました。菩薩とは自らが悟りを求めるだけではなく、人々を導く修行者のことです。大乘菩薩戒とは菩薩としてのあるべき姿勢と、広く生きとし生けるものをいつくしみ救っていかうという大きな誓いをすすめる戒律のことです。道邃さまから菩薩戒を授かったことは、のちの日本天台宗のあり方を決する要因となったのです。

その後、船の出航までの間に越州（現在の紹興）に赴いて、偶然にも靈巖寺の順暁阿闍梨から、当時唐で盛んになっていた密教の一端を伝えられました。

このように大師が唐で学んだ円教（法華経）・密教・坐禪・戒律のどれもが、大師の求める一乗の教えにかなうものだったのです。



▲ 国宝『伝教大師請来目録』伝教大師筆（延暦寺蔵）

帰国後のご活躍

帰国した大師を待っていたのは、桓武天皇の思わしくない病状の報せでした。そして、大師がもたらした密教が、天皇の病氣平癒に対する祈禱として期待を寄せられたのです。

延暦二十五年（八〇六）、大師の上表によって今まで存在した諸宗に加えて新たな年分度者が認められました。年分度者とは、国家が正式に認めた僧侶のことで、毎年決まった人数だけが選ばれ、天台宗には

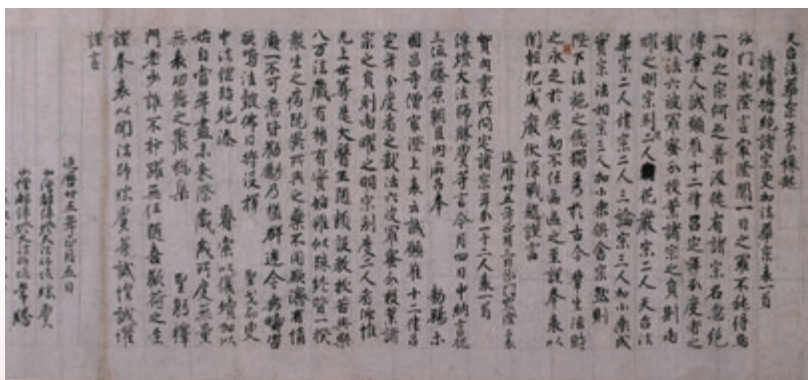
年分度者が二名与えられることになりました。いよいよ天台宗の立教開宗が公に認められたのです。二名のうち、一名は止観業（法華經の修行）、もう一名は遮那業（密教の修行）を専攻するところが決められました。二人の年分度者には、それぞれの修行によって研鑽を積み、ことに加え、国を護るために經典を讀誦し、真言を念ずることが義務づけられました。



▲『伝教大師絵伝』六所宝塔の建立を企画する(延暦寺蔵)

また、大師は弘仁五年（八一四）には九州へ、弘仁八年（八一七）には東国へ赴き、東国ではかつて一切經の書写を手伝ってくれた道忠さまゆかりの寺を訪ね、多くの人々に菩薩戒を授け、密教の入門儀式である灌頂を行いました。また、下野（現在の栃木県内）大慈寺、上野（現在の群馬県内）緑野寺には『法華經』を安置する宝塔が建立されたほか、大師は全国の六カ所にて国を護ることを目ざしたのです。

その頃、会津の法相宗僧侶の徳一法師が天台教学を批判したこと、から、大師との間で教えをめぐる論争が起りました。これは、すべての人が仏となれる一乗の教えを真実とする天台宗と、能力によって仏になれる人となれない人がいるという立場の法相宗との論争であり、大師の晩年まで続けられることになります。



▲国宝『天台法華宗年分縁起』天台宗に年分度者を加える上表(延暦寺蔵)

菩薩僧養成の悲願

日本では、鑑真和上が来日して以来、奈良の東大寺、下野の薬師寺、筑紫（現在の福岡県）観世音寺の三ヶ所に戒律を授ける場である戒壇が設けられ、僧侶としての資格を得る時には必ずそれぞれの戒壇で受戒することになっていました。

しかし大師はこの三戒壇で授ける戒律は、自分だけの悟りをめざす小乗仏教の戒律であって、人々を仏へと導こうとする大乘仏教の菩薩の道を歩もうとする者には、大乘菩薩戒を授けるべきだと考えました。そして比叡山上で菩薩戒による授戒を行い、正式な僧侶を養成することを計画したのです。



▲ 国宝『天台法華宗年分縁起』山家学生式（延暦寺蔵）

同年、大師は「天台法華宗年分学生式」（『山家学生式』六条式）を朝廷に提出し、比叡山で学生を教育するための理念と、教育方法を示しました。

具体的には、天台宗に認可された二人の僧に大乘戒を授けて、十二年間比叡山に住まわせ、純粋な大乘の教えだけを学ばせるといいうものでした。

こうして育てられた人材は国宝、国師、国用の三つに分けられます。国宝とは学問と修行の両方の側面から、すばらしい力を発揮できる人。国師とは学問の面に優れ、自分の学んだことをよく理解できる人。国用とは修行の面に優れて、実行力のある人のことを指します。大師は、国を護るためにこのような人材を養成することを目指したのです。

大師は続いて「勸奨天台宗年分学生式」（八条式）「大乘戒を立てんことを請う表」と「天台法華宗年分度者回小同大式」（四条式）を提出し、大乘戒の授戒による純粋な大乘の僧侶を養成することの重要性を主張しました。

しかし、奈良の仏教者に受け入れられることはなく、僧侶を監督する機関である僧綱からは強い反論が加えられました。

しかし、大師は決してあきらめることなく、さらに『頭戒論』を著して、人々を導き、国を護ることのできる菩薩としての僧侶を育成することを主張したのです。



▲ 頭戒論（延暦寺 叡山文庫蔵）

弘仁十三年(八三二)五月、大師は自らの最期を自覚し、遺言を弟子たちに伝えました。

その遺言の中で大師は、「自分が死んでも喪に服さなくてよい」とおっしゃられ、また、「国家を守護するために毎日、大乘經典の講義を行うように」ということを命じられたのです。

大師は正しい仏教の教えが行き渡れば、ひとびとは心の中に正しい気持ちを抱くこととなり、国が護られると考えました。そして大師の弟子である以上、「人々を救うために、懸命に努力しなければならぬ。正しい修行をおこない、国家の恩に応えなければならぬ」と、死を目の前にしてこのような思いを告げられたのです。

また、「私はいくたびもこの国に生まれ変わって、仏教を学び、一乗の教えを弘めようと思う。私と心を同じくするものは、道を守り、道を修行し、あい思つてその時を待つてほしい」とも述べられています。

伝教大師の弟子たちに向けたご遺誠には、病身においてもなお衰えることのない、大師がご生涯をかけて臨まれた一乗仏教への強い思いが示されているのです。

大師のこの思いが実を結び、悲願であつた比叡山上での大乘

菩薩戒の授戒制度が嵯峨天皇によって認められました。『日本後紀』の逸文には、それは大師がお亡くなりになる一日前の弘仁十三年(八三二)六月三日のことだったと伝えられます。そうであれば、大師はその報せを聞き、悲願が達成されたことへの喜びに満ちあふれてご遷化なされたことでしょう。

そして六月十一日には、比叡山上での得度授戒(僧侶となる儀式)を認可する太政官符が正式に発給されました。比叡山の日本天台宗が、ここに名実ともに根をおろしたのです。

大師がそのご生涯を通じて目ざした仏教は、一乗の教えにあると言えます。大師の思想がきっかけとなり、その後の天台宗では様々な教えが発展することとなりました。

また鎌倉仏教の多くの祖師たちが青年期に比叡山で学び、それぞれの教えを選び求めていったことも、大師が一乗の教えのもとに、『法華経』、密教、坐禪、大乘菩薩戒などのさまざまな教えを採り入れたことに由来するのです。



▲『伝教大師絵伝』大師ご入寂(延暦寺蔵)

伝教大師のめざした仏教



(JR比叡山坂本駅前に立つ青年時代最澄銅像)

菩薩を育てる

伝教大師のめざした仏教とは、どのようなものだったのでしょうか。

『山家学生式』^{さんげがくせいしき}を読むと、伝教大師が「菩薩」^{ぼさつ}たる人材を育てることを第一と考えていることがわかります。大師は、菩薩について「いやなことは自分で引き受け、よいことは他人に与え、自分自身のことは忘れて他の人を利益すること、それが究極の慈悲である」と述べています。慈悲の心のある菩薩の存在があつて

はじめて、世の中の人びとが平穏に生きられるのだと大師は考えていたのでしょうか。

仏教の歴史はインドの釈尊^{しやくそん}より始まりますが、釈尊が亡くなって数百年がたった頃、インドでは大乘という新しい仏教が起りました。大乘の教えはその後、中国、日本へと伝えられています。大乘仏教では、釈尊を理想的な人格者^{じんかくしゃ}ととらえ、菩薩としての生き方が深く求められました。

仏の教えをたよりに現実社会の中で実践につとめる人びとも「菩薩」と呼びます。伝教大師が菩薩となり得る人を育てたいと考えたことは、大師のめざした仏教が大乘にあったことを意味しています。伝教大師は日本を真の大乘仏教の国にしようという意志をもっていたのではないのでしょうか。



▲ 得度授戒会

法華一乗の教え

大乘仏教にもさまざまな教えがあります。そのなかで伝教大師がよりどころとしたのは『法華経』の教えでした。

『法華経』は、数ある経典の中でも特に多くの信仰を集めたことで知られています。『法華経』は古くから中国や日本にも伝来し、東アジアに住む人びとを魅了してきました。この経典の魅力は宗教性や文学性に富んでいるところにあるといえるでしょう。親しみやすい譬喩表現、ドラマチックな叙述など『法華経』を読んでいると、いつのまにか経典の世界に引き込まれていくような感覚があります。

『法華経』は、誰もがみな菩薩であり、将来、仏となることができる、と説くことにその特徴があります。つまり、どのような人であつても釈尊のような生き方をすることが可能であると説いているのです。この教えを『法華経』では「一乗」といいます。

伝教大師は青年時代に師僧の行表さまから「心を一乗に帰すべし」という教えを伝えられていました。また大師のご遺言には「私



▲ 重文 紺紙金銀交書法華経(延暦寺蔵)

はいくたびもこの国に生まれ変わって、仏教を学び、一乗の教えを弘めようと思う」ということばもあります。つまり、『法華経』に説く一乗の教えを実現することが大師にとって一生涯をかけたテーマだったのです。

天台仏教との出会い

伝教大師が学問と修行に励んでいた若い頃、大師は『法華経』を中心とする中国天台宗の教えに出会いました。伝教大師より二百年以上前に中国では天台大師が登場し、以来、天台宗の教えが受け継がれていました。天台大師は『法華経』をよりどころに釈尊以来の教えをまとめあげた人物でありました。仏教にはあまたの教えがありますが、それぞれに価値があることを天台大師は主張しました。これも『法華経』に説く一乗というスケールの大きな教えにもとづいているのです。

伝教大師の入唐の目的は、中国の天台宗の教えを日本に伝えることでありました。異国で学んだ大師は、そこで吸収した教えの数々をひとそろえに日本に伝え、比叡山の地に『法華経』を中心とする日本天台仏教のいしずえをつくりあげたのです。

天台大師の教えに象徴されるように、天台宗は種々の教えを含むことに宗派としての特色があります。まるで色とりどりの花が咲くかのように、伝教大師以降の比叡山には『法華経』の教え、「南無阿弥陀仏」の念仏、護摩などの密教修法、坐禅をはじめとする修

行など、あらゆる仏教が花開きました。比叡山を「日本仏教の母山」といい、各宗派の祖師たちがその比叡山で学んでいたことはけっして偶然ではないのです。



▲ 天台山図(延暦寺蔵)

仏と私との因縁

ところで、『法華経』は何を根拠に、誰もがみな仏となることができるかと説いたのでしょうか。

『法華経』には、「仏たちは一大事因縁のためにこの世に出現した。一大事因縁とは、すべての人びとを仏の智慧に導くことである」と述べられています。つまり、一乗の根拠は、私たち誰もが仏と不可思議な因縁によって結ばれているということなのです。また『法華経』は、時間や空間をこえてつねに仏が私たちに教

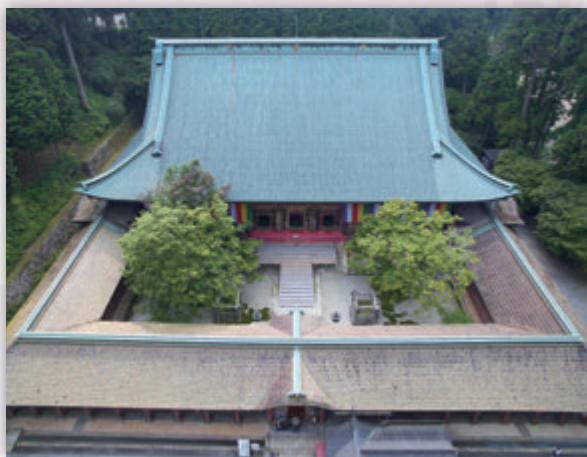
えを説き続けていると説きます。いつでも、どこにあっても私

は仏との因縁をもち続けていることになります。私たちは実にありがたいことに人という尊い存在として生まれてきました。そのような因縁なくして私たちが仏の教えを聞くことはありえません。いかにして私たちは人間としての一生を全うすればよいのか、それが釈尊以来の仏教においていちばん大切なテーマです。『法華経』はそのことを仏と私との因縁という形で説きました。

現代に生きる私たちにとってみれば、釈尊も伝教大師も過去に生きた人に映り見えるかもしれません。しかし、その私たちも実は仏との因縁を結びながら生きています。けっして無関係ではないのです。仏教の教え、そして伝教大師の教えは、はてしない時空を超えて私



▲ 比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」



根本中堂

比叡山延暦寺の総本堂であり、もともとお堂は一乗止観院と呼ばれ、延暦7年(788)に伝教大師によって建立されました。ご本尊の薬師如来は大師が延暦4年(785)に比叡山に入山した際に、東塔北谷虚空蔵尾にあった霊木に一刀三礼して自ら刻んだと伝えられています。中央にはその時に大師が点じた「不滅の法灯」が、今でも絶えることなく灯され続けています。なお、現在のお堂は元亀の法難の後、寛永19年(1642)に徳川三代将軍家光公の命によって再建されたもので、国宝に指定されています。



法華総持院東塔

伝教大師は護国のため、比叡山東塔、比叡山西塔、上野国、筑前国、豊前国、下野国の全国六カ所に『法華経』一千巻を納めた宝塔を建立することを計画されました。その中心となるお堂です。大師がお亡くなりになった後、その意志を継いで慈覚大師により創建されました。



戒壇院

伝教大師の悲願であった大乘菩薩戒の授戒が行われているお堂です。現在でも毎年10月に円頓大戒授戒会が開かれています。大乘戒勅許から五年後の天長4年(827)に義真によって創建されました。本尊には授戒の三師である釈迦牟尼仏、文殊菩薩、弥勒菩薩の三尊が祀られています。



大黒堂

根本中堂創建の頃、伝教大師が感得された大黒天尊で、大師自身が感激してそのお姿を刻んだと伝えられています。その後、大師自作の、大黒天・毘沙門天・弁財天の三つのお姿が合わさった三面大黒天の像を弟子の光定和尚が比叡山守護のためにお祀りしたのが大黒堂のはじめとされ、ここを起点に全国に大黒天の信仰が広まりました。豊臣秀吉はこの大黒天を信仰して全国統一を果たしたとも言われています。



浄土院

伝教大師の御廟であり、比叡山の中でも最も清浄な聖域とされています。慈覚大師によって仁寿4年(854)に建立されました。ここでは侍真僧と呼ばれる僧侶が、十二年籠山行を行っており、休むことなく大師の御影の前に朝・昼の二度の献膳を行っています。また本尊として大師自刻の阿弥陀如来が祀られています。



釈迦堂

比叡山西塔の中心のお堂であり、転法輪堂とも呼ばれています。伝教大師の付嘱を受けて承和元年(834)円澄によって創建されました。本尊の釈迦如来は根本中堂の薬師如来、浄土院の阿弥陀如来とともに、伝教大師が虚空蔵尾の霊木を用いて自ら刻まれたと伝えられています。



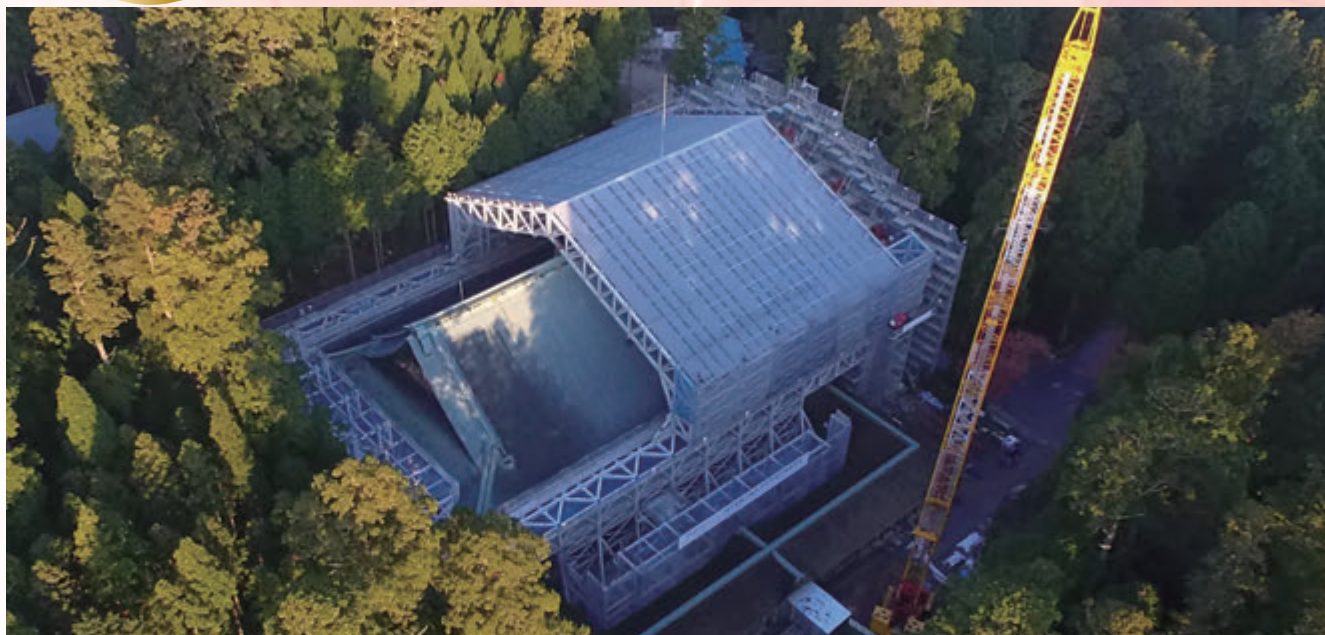
生源寺

山門のかたわらには、「開山伝教大師御誕生地」の碑があり、伝教大師生誕の地として親しまれています。大師の母の実家、あるいは父百枝の私宅であったとも言われています。山門をに入って右手には古井戸があり、大師の産湯に用いたと伝えられています。



神宮禅院

伝教大師の父三津首百枝が、後継を授かることを祈念して、七日間の懺悔の行を修するために草庵を建立したことに始まる場所です。四日目の早朝に芳香がただよふという奇瑞があり、大師を授かったことがわかりました。伝教大師は比叡入山の前に、ここで父の不足分の懺悔の行を行い、香炉の中に仏舍利を感得した後、比叡山に登ったと伝えられています。



根本中堂大改修について

比叡山延暦寺では、大法会の特別記念事業として60年ぶりとなる総本堂根本中堂の改修事業を行なっています。伝教大師の創建以来1230年、現在の建物が再建されて380年。不滅の法灯と共に延暦寺の祈りと伝統を次代へと伝える歴史的事業です。



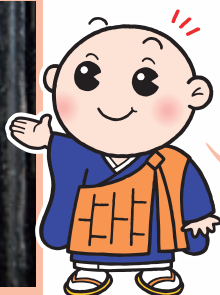
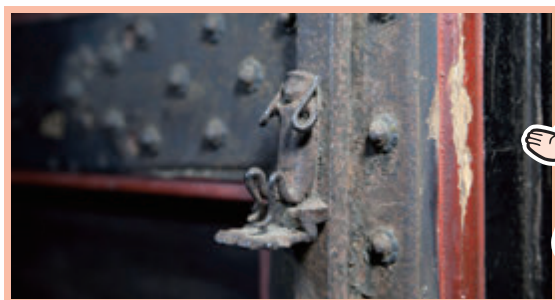
本堂屋根 瓦棒銅板葺「葺き替え」

根本中堂の屋根には下地の上に14000枚もの銅板が張られていて、銅板の傷みが激しいから屋根全体の張り替えをするんだ！



廻廊屋根 とち葺「葺き替え」

廻廊の屋根は「とち葺」という工法でサワラの木が使われているんだ。部材の板が割れたり、くさっているから全面的に葺き替えるよ！



飾り金具の修理

扉や柱など様々な場所に金具がついていて、中にはお猿さんやセミなどが彫られていたりもするよ。金箔を押ししたり、焼漆(やきうるし)もやり直して欠けている金具は新調するよ！

中陣花天井「洗淨剥落止め」

中陣の天井絵は「花天井」と呼ばれ、仏様へのお供えなんだ。彩色は建立当初のものが残っていると考えられているので、汚れを可能な限り落として現状を保存する剥落止めをするよ！



中陣 欄間彫刻 彩色修理

内陣と中陣の境にある欄間彫刻は、内碁五郎一門の作品と言われているんだ。調べてみると何度か塗り直しされている形跡があって、今後さらに詳細な調査をして、修理の時期と方法を決定するよ！



外部塗装 塗直し

宝永年間の古文書に基づいて全面的に塗直しをするよ。塗料を膠(にかわ)で溶いた「丹塗(たんぬり)」、同じく油で溶いた「ちゃん塗」などの文化財的技法が用いられているんだ。墓股(かえるまた)の彫刻も色鮮やかに復元されるよ。建具も黒漆(くろうし)を塗り直すんだ！



国宝根本中堂大改修 ご懇志のお願い

天台宗並びに総本山延暦寺が此の度の祖師先徳鑽仰大法会の特別記念大事業として取り組んでおります根本中堂大改修工事は、去る平成28年(2016)から着工し、今後の本格修理工事に向け進んでおります。総額50億円に及ぶ本工事は、天台宗はもとより延暦寺にとりまして歴史に特筆される大事業と存じます。

すでに宗内ご寺院様、檀信徒の皆様を始め有縁の方々より大改修事業への懇志ご浄財をお寄せいただいておりますこと、誠に有難く衷心より厚く御礼を申し上げます。

目下改修工事の進捗状況は、本堂建物・回廊の全体を覆う仮設覆屋棟が建設され、今後本堂及び回廊屋根の葺替や全体の塗装工事等に向けた作業が進められます。又、お堂中庭に「修学ステージ」を設けて工事中の一部をご覧頂けるようにし、現代の文化財保存修理の様子をご確認いただけます。

ご高承の通り、平成33年(2021)に伝教大師一千二百年大遠忌をお迎え致します。この度の大改修の勝縁を通し、伝教大師が人々の幸せのために尽くさんと発願された尊い御心を発信し続ける根本道場として、私どもはこの総本堂を後世にしっかりと伝えて、ご鴻恩におこたえしたく存じます。

尚、今大法会の奉修は平成34年(2022)3月末までですが、根本中堂大改修事業は平成38年(2026)3月末まで引き続き行われます。

宗徒の皆様を始め、ご登観参拝の方々には長期ご迷惑をお掛けしますとともに何かとご無理を申し上げますが、大改修事業遂志成満に向け、更なるご支援を懇請申し上げます。

合 掌

平成30年4月1日

比叡山延暦寺執行 祖師先徳鑽仰大法会事務局奉行

小堀 光實

根本中堂大改修費勧募につきまして

【お問い合わせ先】

天台宗 祖師先徳鑽仰大法会事務局 TEL : 077-579-0022 URL : <http://www.tendai.or.jp/daihoue/>

発心会

発心とは「発菩提心」(ほつぽだいしん)の略で、御仏(みほとけ)に近づく心を発(おこ)す、仏教徒の出発点です。

人間は決して一人では生きて行けず、多くの人々やあらゆるものに支えられ、生かされています。それらに感謝する心が「発菩提心」につながります。

この度、祖師先徳鑽仰大法会では「発心(ほっしん)のおつとめ」を作成いたしました。

日々のお仏壇でのお勤め、菩提寺や身近なお寺でのお参り、総本山への参拝、または、様々な行事「特別授戒会(とくべつじゅかいえ)、結縁灌頂会(けちえんかんじょうえ)、写経会(しゃきょうえ)」に併せて、くりかえしお唱えいただくことによって、信心と共に仏の御心が私たちの心に沁(し)み込んでくるのです。



延暦寺参拝のおすすめ

伝教大師一千二百年大遠忌をお迎えするこの機会に世界文化遺産・天台宗総本山比叡山延暦寺への参拝をおすすめいたします。

根本中堂がある延暦寺の中心である東塔(とうとう)地区、釈迦堂など諸堂が点在する西塔(さいとう)地区、慈覚大師が開いた横川(よかわ)地区など1200年の歴史に触れてみてはいかがでしょうか。

日本文化の礎を築かれた宗祖への報恩と共に足跡を辿(たど)りながら、日本仏教の母山である延暦寺へのご登観をお待ち申し上げます。



▲ 東塔・根本中堂



▲ 延暦寺会館



▲ 西塔・釈迦堂



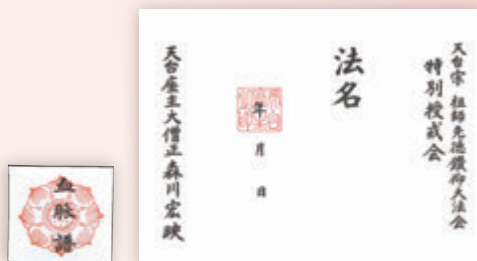
▲ 横川・横川中堂

とくべつ じゅかい

あなたの中の御仏を感じてみませんか

特別授戒

私たちは、生まれながらに持っているかけがえのない御仏との絆を自覚し、心の力に目覚めることが必要です。その手がかりが円頓授戒です。授戒会では、御仏の光があなた自身の身中に入り、自己本来の仏性を目覚めさせます。あなたは、お釈迦さまの真(まこと)の子として、また伝教大師と同じ心をもって行動する菩薩となるのです。今、あなたの心の内にある御仏への一歩、お授戒をおすすめいたします。



けちえん かんじょう

あなたの守り本尊と出会いませんか

結縁灌頂

曼荼羅の上に華(はな)を投げ、華の落ちた所の御仏と縁を結ぶ天台密教の入門式です。結縁灌頂は、何度でも受けることができ、そのたびに功德を積み、御仏との法縁を深めていくものです。比叡山延暦寺にて御仏とのご縁を結ぶ神秘的な体験は、きっとあなたの大きな心の安らぎとなることでしょう。



心を清め、身体もリラックスしましょう

写経のおすすめ

お経を書き写す写経は、いつでも、どこでも、はじめられます。お寺で開かれる写経会に参加したり、ご自宅で毎日少しずつ書き進めたりすることもできます。

ご先祖の供養や自分自身の願いを込めて、御仏を刻むような気持ちで一字一字お書きください。心を清めるとともに、身体もリラックスすることができます。





天台宗

祖師先德鑽仰大法会事務局

滋賀県大津市坂本4-6-2 天台宗務庁内

TEL.077-579-0022

<http://www.tendai.or.jp/daihoue/>



取扱寺院